

### 第三章 罰

星の子は友達のところに行きましたが、彼らは星の子を見て笑いました。

「お前は醜いから、僕たちはお前と遊びたくない」と彼らは言いました。

「どうして彼らはこんなことを僕に言うのだろうか？」と星の子は思いました。

星の子は、自分の姿を見るために井戸に行きました。

今や、星の子は別人でした。

星の子はヒキガエルのような顔に、蛇のような肌をしていたのです。

それから星の子は理解し、泣き出しました。

「これは僕の罰なのだ」と星の子は言いました。

「僕はとても冷酷で、僕のお母さんは苦しんだ。これからお母さんを見つけて謝らなくては」木こりの小さな娘は星の子に、「あなたが醜くかったとしても、それは重要なことじゃないわ。ここにいてちょうだい。私はあなたのことを笑ったりしないから」と言いました。

「いいや、これは僕の罰なんだ」と星の子は答えました。

「僕はお母さんのことをとてもひどく扱ったから、これからお母さんを見つけなければいけないんだ」

星の子は、「お母さん！ お母さん！ 僕が悪かったよ、戻って来てください」と呼びながら、森の中へと走って行きました。

星の子は一日中呼びましたが、誰も答えませんでした。

夜が来ると、星の子は木の葉のベッドの上で眠りましたが、動物たちは星の子を見ると逃げて行きました。

星の子が冷酷な少年であるということを、動物たちは知っていたのです。

星の子はモグラに、「君は地面の下に行くことができる。僕のお母さんがそこにいたら、僕に教えてくれないか？」と言いました。

「君のお母さんがそこにいるか、僕には分からないよ。僕は目が見えない、なぜなら君が僕の目を傷つけたから」とモグラは答えました。

星の子は小鳥に、「君は木の上を飛ぶことができる。僕のお母さんが見えたら、僕に教えておくれ」と言いました。

「あなたのお母さんがそこにいるか、私には分からないわ。私は飛べない、なぜならあなたが私の翼を傷つけたから」と鳥は答えました。

星の子は小リスを見て、「僕のお母さんはどこ？」と尋ねました。

「僕には分からないよ」とリスは答えました。

「君は僕のお母さんを殺した。自分のお母さんも殺したいと思っているの？」

星の子はこれら全てのことを聞くと、泣いて、自分を許してくれるよう神に祈りました。

星の子は母親を見つけるために、たくさんの色々な村を旅しましたが、これらの村の子どもたちは星の子を笑い、星の子に石を投げました。

誰も星の子に対して哀れみの気持ちを持ちませんでした。